AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録（2014.12）平成２５年度:13.

医原性褥瘡に関する実態把握への取り組み

佐藤 仁美,日野岡 蘭子

医原性褥瘡に関する実態把握への取り組み

○佐藤　仁美[1]、日野岡蘭子[2]
1 旭川医科大学病院ＩＣＵナースステーション
2 旭川医科大学病院看護部

【目的】

医原性褥瘡とは医療機器や治療に使用するものが原因と考えられ組織損傷を指す。今後褥瘡の範疇に含まれることが検討されており、その場合には褥瘡発生率が上昇することが予測される。Ａ病院での対策がほとんどされていなかった医原性皮膚損傷について、実態把握と対策への取り組みについて検討したことを報告する。

【方法】

範囲を褥瘡発生に係る要因及び褥瘡学会における報告をもとに実態とあわせて暫定的に決定し、分析を実施したものとして①フットポンプやストッキング等のＤＶＴ予防具、②各種チューブ（テープ固定も含めて）とした。

【結果】

フットポンプ・ストッキングでは、長期間の安静と自力体動の有無に関連があり、短期間使用症例より長期間使用例の発症が多かった。テープ固定・剥離では貼付時の皮膚表層の摩擦とずれ、角質損傷によるものが多く、皮膚の脆弱性、乾燥、湿潤が要因であった。ステロイド長期使用例が１例で、長期又は多量の使用での浮腫、皮膚は菲薄化によるリスクは極めて高かった。

【考察】

フットポンプ、ストッキングでは、長期事例の方に発症が多かったが、長期とは何日以上でリスクが増加するのか、原疾患の状態も含めて身体のリスクがどの程度であれば発症の危険が増すのか等、今後分析すべき事項が明確になった。専門チームへ望むことは選択基準および解放の基準の制定である。一方でフットポンプでは繰り返す圧迫、ストッキングでは摩擦とズレが人為的に引き起こされている状態であり、圧迫の強さの調整が困難であれば、時間を短縮する、繰り返す摩擦とずれは、滑る素材を用いて摩擦係数を低く抑えるなど、褥瘡予防に共通するスキンケアの基本が重要と考える。

利益相反なし。